

創造的活動をとり入れた音楽科の学習

——教材「古いしらかばの木」の授業実践から——

矢澤 千宜・乗富 章子*

Music Learning with Creative Activities :

From the Classroom Lesson Based on the Teaching Material "Old Birch"

Chiyoshi YAZAWA and Akiko NORITOMI

はじめに

平成4年度から実施されている小学校新学習指導要領では、「新しい学力観」が大きくとりあげられている。それは、子どもが自ら考え、主体的に判断し、自信を持って表現したり行動したりすることのできる資質や能力を育成することをめざして、学校教育のあり方を問い直すとしたものである。つまり、自分らしさ、その子なりのよさを授業に十分に生かそうという姿勢のあらわれと考えられる。

音楽科においても、新しい学力観の考えのもと、授業の新しい方向が示された。それは、子ども一人ひとりが自分なりの感じ方、考え方、生き方など自分の思いに基づいて、これまで経験したり学んだりしたことを生かしながら、新しい課題に進んで関わっていくことを大切にしていくことである。そして、子ども自身が自ら感じとったり、考えたり、判断したり、工夫して表現したりすることを機軸にして、創造的な音楽活動が展開されるような音楽科の授業の実現をめざしている。

本論は、上記の方向をめざして取り組んだ、小学校4年生の実践をまとめたものである。

1. 単元(題材)の目標

・「古いしらかばの木」の物語文を読んで、身近なものや楽器などでそのイメージを表現し、簡単な図形楽譜に表すことができるよう

にする。

2. 指導にあたって

本題材は、低学年からの「音あそび」の流れを受け、子どもたちが自ら音を操作したり、創り出したりして、ひとつの作品を創作することを試みたものである。この学級の子どもたちは、音楽が大好きで歌を歌うこともリコーダーを演奏することも得意な子が多い反面、自分は音楽に向いていないのだと勝手に決め込んで進んで歌うことも、リコーダーを吹くこともしない子もいる。発達段階から見ても、大声を張り上げて夢中になって歌う低学年の時代が終わり、人前で演奏することが恥ずかしくなってきたとも考えられる。このような子どもたちに、音そのものに対する感覚をもう一度呼び覚まし、新鮮な感覚で自分にとっての音楽とは何なのかを考え直す機会を持たせたいと考えた。これが本題材の設定理由である。

「音あそび」の学習は、本来一人ひとりの子どもの能力に従っての個人差に応じた学習が中心である。しかし、本題材で扱う「古いしらかばの木」(立原えりか作 国語科東書4年上)は、子どもたちがかなり共通したイメージをもって国語科の学習を終えているので、個々の自由な発想を生かしながらも、グループ学習が可能であると考えた。グループでいくつかの音を合わせて表現することにより、イメージがよ

り鮮やかに描き出されるであろう。また、グループで表現するからこそ、個々の子どもたちの持つ力が見直され、互いの良さを認め合いながら学習を進めていくことができるだろう。

図形楽譜については、自分たちが創り出した

音を記録していくために便利なものだということが理解できれば良いと考えている。聴く力をもとに、よりイメージに迫る表現方法や表現技能を求めていく子どもたちの姿を願っている。

3. 指導計画（総時数 11時限）

次	主 な 活 動	教 師 の 働 き か け	備 考
一	1 即興的な音遊びをして楽しむ ・時計の音 ・小鳥の鳴き声 ・雨の音 ・風の音 ・朝 昼 夕方 夜 ・四季の変化 ・喜び 悲しみ ・楽しさ 寂しさ等	〈音遊びや音作りをして楽しもう〉 ・低学年の時の経験を生かして具体的な音作りから始める ・次第に抽象的な音へと目を向けさせる ・変化のある様子の表し方を工夫させる ・イメージを大切にしたい音作りを心がける	考察1
次	ものや様子のイメージを音で表現できた これも音楽の勉強なんだ 思ったより簡単に楽しい これを残すにはどうしたらよいだろう		
(4)	2 図形楽譜について知り 作る ・資料を見て図形楽譜について理解する ・自分の作った音を図形楽譜に表す	〈自分がイメージして作った音を図形楽譜に表してみよう〉 ・既成の作品やジョン・ケージの作品を見せる ・自由に描かせて互いに鑑賞する	考察2
	図形楽譜は五線譜より見やすい 音譜が苦手の人でもわかるようだ		
二	〈図形楽譜を使ってまとまった物語を音で表現したいね〉 ・できそうだよ みんなの気に入った「古いしらかばの木」だ 《「古いしらかばの木」のイメージを物語の流れに沿って音で表そう》 3 場面分けする A二本のしらかばの木 Bわかいしらかばに歌を教えている 古いしらかば C嵐の予感 D嵐 E激しい雨 F雷 G嵐のあとのまぶしい朝 H狩人によって火の中に投げ入れられる古いしらかばの枝 I (A)歌を完璧に歌えるようになったわかいしらかばの高らかな歌声	〈どこを音で表現したいの?〉 ・自分が表現したいと思った場面を選ばせる ・希望した場面ごとに集まったメンバーでグループを作る ・グループで話し合いながら楽器を決めたり 音作りをしたりするという見通しを全員に持たせる	考察3
次	物語の流れにそって音作りの場面分けができたよ さっそく始めよう		

(5)	<p>4 試しの演奏をする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ A は木琴群で ソプラノ アルト テナー バスの木琴を使って ・ B も木琴を中心に (オルフの木琴を使う) ・ C はシンセサイザーと太鼓を組み合わせて ・ D E F はシンセサイザーを中心に ・ G は金属系の楽器で 鉄琴 ツリーチャイム ハンドベル トライアングル等 ・ H は身近な素材を使った手作りの 楽器で 手拍子 ささら等 <p>5 図形楽譜に表わす</p>	<p>〈どんな音で表現したいの?〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 皮 金属 木 電子音 身近なものなど の中から自分たちのイメージに合った音 をつくり出すようにする ・ 試しの演奏を納得できるまでくりかえし 行う ・ 音作りの楽しさを十分味わわせる ・ 一時限ごとのグループのめあてをきめて ふりかえりもさせながら到達の度合いが わかるようにする ・ 迷ったり悩んだりしているグループや個 に対しては問題点を明らかにしてクラス 全部で相談し合うようにする 	<p>考察 4</p> <p>各グループへの支援</p>
三 次	<p>〈朗読と合わせて演奏し 私たちの作品として記録しよう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 朗読の役割分担を決める ・ 朗読と演奏を合わせる ・ VTR に撮る 感想文を書く 	<p>物語の流れにそってイメージしたものを音で表すことができたよ 図形楽譜にも描くことができた さあ朗読と合わせてみよう</p>	<p>ぼくたちだけの素晴らしい「古いしらかばの木」の創作作品ができあがった いろいろな工夫をしてふしぎな音作りもたくさん経験できた 図形楽譜のよ さを見つけることもできた</p>

4. 授業の実際と考察

(1) 一次の1時・2時

- ・ ねらい 即興的な音遊び音作りをして楽しむことができる
- ・ 授業の実際

教師が準備した、時計の音、小鳥の鳴き声、雨の音の3枚のカードを見て、そのイメージにふさわしい音を楽器で表す。

これは、とても簡単で子どもたちはすぐに楽器を見つけて思い思いに表現していた。時計の音は、ウッドブロックが圧倒的に多かったが、中にはトライアングルで響きを消して、チチチ……という音を創る子もいた。

小鳥の鳴き声は、カッコウ笛、水笛、オカリ

ナ、リコーダー、リコーダーの吹き口だけを使ったものなどこれも楽しみながら創っていた。

雨の音では、ハイハットシンバル、木魚、小太鼓、小太鼓の響き線を外したものなどを使った子が多かった。中には、木琴を使ってメロディを創る子もいた。

抽象的なものの音作りを試みる。

風の音をきっかけにして、朝、昼、夕方そして夜といった時間の移り変わりの様子を音で表してみたいという子どもたちが増えてきた。そこで、四季とその変化、喜びや悲しみ、楽しさ、寂しさなど、イメージを表す活動へ移っていくことにした。

そして、楽器の一つとしてシンセサイザーを使わせてみた。

様々な活動のあと、教師は「今日創った音やメロディを次の音楽の時間も同じように出すことが出来ますか?」と問い、次時の課題とした。

考察1

この音遊びはおそらく低学年の時には何度も経験していると思われた。しかし教師の予想を上回るほどの発想が見られなかった。それは、音楽室に置かれている楽器をまだ十分に使っていないからだと思われる。本校では音楽室の使用は3年生からであるし、3年生ではどうしても初めて触るリコーダーに子どもたちの興味関心が集中し、その他の楽器の指導を十分に行うことが難しい。そこで、4年生でこそ、音楽室のたくさんの楽器に触れ、その奏法や特徴を十分に知って、高学年のより幅の広い音楽の活動に備えるべきであると考えた。

また、時には「音楽室の楽器で遊ぼう」というような自由な活動を保障する時間も必要であろう。

シンセサイザーは子どもたちにとって大変興味深い楽器だった。特に、風や雨の音、嵐、宇宙の音など、ボタン一つでイメージが沸き上がるような音が創れるので、次々と列を付いていろいろな音創りを試す姿がみられた。

教師の「次の時間も同じように……」という問いかけに対して、子どもたちは「覚えたから大丈夫」と答えていた。確かに子どもたちの記憶力は抜群で次の時間でも、同じように演奏することができる子がほとんどだった。ごく一部の子が同じ演奏が出来なかったのだが、そこを追求して「だから図形楽譜が……」と次時の課題に入っていくことは余りにも強引に思われてできなかった。

(2) 一次の3時・4時

・ねらい 図形楽譜について知り、作ることができる。

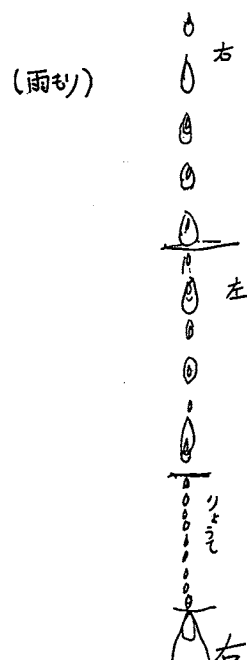
授業の実際

いくつかの図形楽譜をみて図形楽譜とは何かを知り、実際に作ってみる。

資料として、本などに紹介されていた図形楽譜をいくつか見せる。小学生の作ったものから、ジョン・ケージの作品まで、できるだけ広い範囲で典型的な作品を提示した。これも楽譜なのだと知らせると、子どもたちは一様に??というような顔をした。教師の説明を聞いてようやく本時の自分たちがすることに気づいた様子であった。

そして、前時に自分たちが作ったもの(この時点では子どもたちはまだそれを「作品」とは思っていない。)を図形楽譜に表してみようとし始めた。ああでもない、こうするとイメージがちがってくる、などつぶやきながら、いろいろに試しがきをしていた。出来上がった子から、また音で確かめてみる姿が多く見られた。

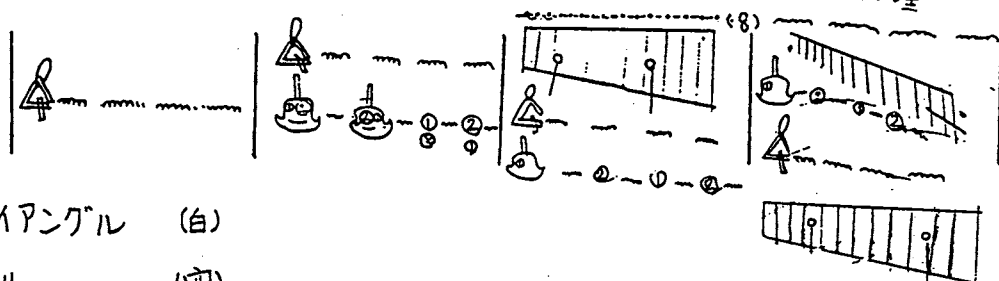
〔作品例〕



[作品例]

題 夜

名前(石川 白藤 安部 若林 瀬澤)



トライアングル (白)

ベル (定)

てっきん (石)(若)

ウインドチャーム ~~1114~~ (未)

しずかな夜の様子

メンバー カロ納・石黒

大 小 大 小 四 四 四 四


~~XIX~~

右	左	右	右	左	左	左	右	左	右
左	右	左	右	右	左	左	左	右	左

~~XXI~~

左	右	左	右	右	左	左	左	右	左
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

カカ

タンブリン $\triangle_{\text{加}}$ 

人

どんなふうに...

時計の音がなつて、12時のため
かなるそしてまた、時計の音がきこ
こるそして星がきれいに見え
る小さい星もい、ばい見えて
ななれ星も見るきれいな夜
会

考察2

普通は、楽譜を見てから演奏する。(即興演奏はイメージをすぐに演奏するが)

本時では、即興に近い形で演奏したあとでそれを図形楽譜というこれまでに子どもたちが経験したことのない楽譜で表し、それが先の演奏と同じであるかどうか確かめるようなめあてを持たせて、再び演奏させてみるという順序で学習を進めた。

目新しい活動であったためか、子どもたちは大変意欲的だった。何度も書き直ししながら楽しい作品をつぎつぎに仕上げていくことができた。

子どもたちは、紙の大きさや形、図形の色にもかなりこだわっている。「みただけで他の人にもイメージが伝わる」という子どもならではの図形楽譜のよさに気づくことができたようである。

ここでの教師の大きなねらいは、一次の授業を終えていよいよ本題材の中心活動に入った時に、図形楽譜の良さを思い出す伏線として本時が位置付くことであった。このねらいは、「図形楽譜って思ったよりずっと面白いし、簡単だ。」「五線譜よりも見やすい」「書く方も自由なら、演奏する方も聴く方も自由ってところがいいね。」「こんなのも音楽の仲間だなんて楽しい」などといった子どもたちの声からも、十分に達成できたといえるだろう。とくに「図形楽譜だと伝えようとするイメージがそのまま楽譜に現れてくる」と言ったM子の言葉が嬉しかった。

(3) 二次の1時

- ・ねらい 図形楽譜を使って何かを表現できないか考え、課題をつかむことができる。
- ・授業の実際

図形楽譜を使って何かまとまったものを表現しようとする。

この課題は子どもたちにとってさほど抵抗があるとは思われなかったのでそのまま伝えた。案の定、子どもたちは即座に「古いしらかばの木」がいいと決めた。そして、まずどんな事から始めていくかについて、話し合いを始めた。

その結果、1. 場面分け 2. 音創り 3. 図形楽譜作り 4. 朗読と合わせるという活動の見通しを立てることができた。

(4) 二次の2時

- ・ねらい 場面分けをして、自分の表現したい場面をきめ、グループづくりができる。
- ・授業の実際

まず、場面分けをした。

- A. 二本のしらかばの木を表すところ
- B. 歌を一生懸命教えようとしている古いしらかばと覚えようとしている若いしらかば
- C. 嵐の予感
嵐の場面
- D. 風
- E. 雨
- F. 雷
- G. 嵐の中でも懸命に歌っている二本のしらかば
- H. 嵐のあとの真っ青な空の様子

燃えながら最後の歌を聴かせる古いしらかば
I = A. しっかりと最後まで歌えるようになった若いしらかばの高らかな歌声

この場面分けは、国語の授業での場面分けと少し異なっていた。音であらわそうとすると微妙にちがってくるらしい。

つぎに、このAからHまでの場面の中で、自分が表現してみたいと思うところを自分で選べた。あくまでも自分の考えを大切にしていってことを念を押して子どもたちに伝えた。

それぞれに選んだのち、「御対面」をし、それがこのあとの全ての創作的活動を行うグループとなるのである。子どもたちは、意外なメンバー構成に大騒ぎしていたが、自分の気に入った場面にするのか、自分の気に入ったメンバーにするのかを確認したところやはり自分で選ん

だ場面をすることでおちついた。勿論、始めから仲良しの友達と申しあわせて場面を選んだ子もいたのだが、そのグループへはいつてくる他の子も当然いるので、これまでに体験したことのないメンバー構成による、面白いグループが出来上がった。

考察 3

「古いしらかばの木」を音で表現しよう、というめあては、子どもたちにとって大変だけれども大きな魅力もあるものであったようだ。(教師としては言ってみたものの本当にできるのだろうかという不安も大きく、子どもたち以上に心配していた。)

従って、場面分けも、グループづくりも比較的スムーズに行うことができた。ここで教師がくり返し子どもたちに言い続けたことは、「自分が表現してみたいと思ったところを選ぶ」即ち、自分の気持ちを何よりも優先するということであった。

同時に、場面を選ぶと言うことは、ある程度表現の仕方が自分なりにイメージされているということでもある。何人かのメンバーでそのあたりをどのようにして話し合い、解決していくかも大きな課題であると予想された。さらに、音楽が他の教科に比べて苦手だとか嫌いだとかといった声を耳にするようになったこの時期、上手に歌えなくても、上手に笛がふけなくても、音楽を創り楽しむことができることを分からせたいという、教師の切実な願いが何よりも大きかった。

(5) 二次の3時、4時、5時

・ねらい 試しの演奏をし、自分のイメージに近い音を見つかったり、創ったりすることができる。また、同じグループのメンバーと仲良く根気よく話し合ったり、助け合ったりして、音作りの活動ができる。

・授業の実際と考察 4

まず、どの楽器群から楽器を選んで音作りをするかについて話し合いをした。

その結果、

- A 木琴群
- B 木琴群（オルフの楽器を中心に）
- C シンセサイザーと大太鼓
- D シンセサイザー
- E カバサ、マラカス、ピアノの低音部
- F ティンパニーと金属系の楽器
- G 何か身近なものを使って???
- H 小さな金属系の打楽器を中心に

というように一応おちついた。

そして、A、C、Fのグループはある程度話し合いが進んだ段階で早速楽器に向かって行った。特にAグループは音楽的にも能力の高い子どもたちが多く集まり、即興演奏もなかなかの出来だった。Cグループは、シンセサイザーであそんでいるような感じだったが、少しずつ音作りの方向へと活動をしばっていているように見えた。Fグループは、ティンパニー、ハイハットシンバル、小太鼓、大太鼓の組合せでなかなか大胆なリズムに乗った音作りを楽しんでいた。

一方、B、E、G、Hのグループはなかなか意見がまとまらず、行き詰まっているようだった。

そこで、行き詰まりの原因を探って、個やグループに支援することにした。

Bグループへの支援

このグループの行き詰まりの原因は、いつも自分の意見を通して（しかもその意見が理にかなっており、説得力もあるので）他を受け入れようとしないうK子の存在である。K子は、Aの場面と同じように、二本のしらかばの木を表すのだから、木琴群でAとは少しだけ違ったメロディを創ろうと考えていた。けれども、Aグループのように上手に木琴が弾けないというO男の主張と対立し、イライラしていた。

そこで、オルフの楽器を使ったり（必要な音だけ用意すればよいから）、O男の考えていたトライアングルをアクセントに入れることに

よって、Aグループとはひと味違ったステキな音創りができるのでは？と助言した。

もともと独創的な考え方が好きで、人の真似はできるだけ避けたいと思っているK子にはとても良い助言だったようである。

Eグループへの支援

ここは普段互いに殆ど一緒に遊んだことも同じ班になったこともないメンバーでグループが出来てしまったために、互いに譲り合うこともなく、かといって助け合うこともなくて自分で自分の楽器選びをするだけで精一杯という様な状態であった。

そこで、なんとか三人の考えを出し合って自分たちそれぞれが満足できる音づくりをするように声をかけるとともに、どの楽器をどのような奏法でどんなリズムでというようなところまで助言する必要があった。幸いにもメンバーの一人であるS子が積極的にリードするようになってきたので、望ましい方向に向かうことができた。

Gグループへの支援

このグループには、T男という自称音楽大嫌い男がいる。男児の人气が高く、正義感もある子なのだが、音楽特に、歌うこと、笛を吹くことが大嫌いであって授業でも反発的な態度をとることが目立っていた。T男は、始め新聞紙を破ったり、まるめて椅子をたたいたりする音創りを考えていた。しかしそれでは音楽の流れに乗らないし、アピールが弱いと他の子から指摘され、ますますやる気をなくしていった。同じグループのM男の誠実な対応のおかげで、クラスの子全員の協力を得て拍手でリズムをつくることでようやく納得しかけていた。そこで教師はバスマスターで拍手の音がでるところを教えた。T男は全員の拍手を自分のバスマスターの音でリードできるので大変満足し、それをきっかけにしてすねたりすることもだんだん少なくなっていく。

Hグループへの支援

どうしたわけかこのグループはI子とU子のたったふたりのグループになってしまった。しかもふたりとも、いつもだれかにリードされて活動することが多く、自分の考えを持つことからして難しい。ほかのグループの活動をみたり、相談にのってもらったりしながら楽器を選んでいった。ところが選んだ楽器は、鈴、トライアングル、ハンドベル、フィンガーシンバルそして拍手で、到底二人だけでは演奏できない。そこでクラス全員で話し合う時間を作った。

その結果、楽器を少し減らすこと、拍手は前のT男のようにクラス全員が協力すること、そのようにしてもこの物語の最後の音楽にするには、印象が弱すぎるので、このグループの演奏の後、もう一度Aグループの演奏を入れることなどが決まった。

それぞれのグループの演奏が一応完成した時点で、それを自分たちがしっかりと覚えておくために図形楽譜に書き残した。この授業のあと本校では教育実習にはいり、つづきの授業が一ヵ月間でできなくなるからである。

(6) 三次の1. 2時

- ・ねらい 朗読と合わせて演奏し、作品の仕上げをする。また、VTRに撮ってそれを鑑賞し、それぞれに感想を持ったり（自己評価）、友達の良いところを認め合ったりすることができる。
- ・授業の実際

VTRに撮ることに決まると、はじめのうちは嬉しくて大騒ぎしていた子供たちも次第に緊張して、本番では思わぬ失敗もあった。しかし教師はこれが現在の偽りのない子供の姿なのだと素直に受け止めておきたい。

5. 実践を終えて

教育実習のあと、再び本題材に戻った時、もしかして子供たちは「またか」とやる気をなくしてしまっているのではないかと心配していた。

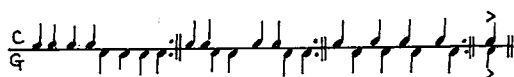
けれどもそれは全くの杞憂にすぎなかった。さらに図形楽譜の必要性にも一ヵ月間の空白の時間は十二分の役割を果たしてくれた。よく、音楽の授業は週に2時限しかないのだから、1時限ごとの子供の伸びが明白でなくてはならないといわれるが、もっと長くしておおらかな目で子供の伸びを見守ってもいいのではないかとの思いを強くした。最後に、本実践を終えて、その成果と今後の課題について述べることにする。

(1) 成果

本実践における一番のねらいは、「音そのものに対する感覚を呼び覚ます」ということであった。

低学年の音楽の授業では音遊びが活動の大半を占め、楽しく活動することに重点が置かれている。それが学年が進むにつれて、うまく歌えたかとか、リコーダーが吹けたかといった所謂技術的なことが、評価されて（教師にとっても評価しやすいので）その結果、それらの出来不出来が音楽の能力として評価されてしまう。そして、音楽嫌いの子供を作ることになってしまうのである。このクラスのT男もその典型である。このような子に「音楽って意外とおもしろいぞ」といわせたかった。そして見事に成功した。T男はそのあと日記に「リコーダーの穴は大きいのと小さいのと一つひとつ違うことを発見したぞ」などと書いてきたりして、相変わらず恰好つけながらも、可愛いところを見せてくれるようになってきた。

また、Aグループはたまたま音楽的な力が十分にある女子が集まった。木琴を使っでの演奏もまた創作したメロディやリズムの変化も実に見事で、見応え聞き応え十分であった。さらに、FグループのティンパニーのY男の創作したリズムは、



というもので、それがシンバルや太鼓と組合わさることで大変迫力のある演奏になっていた。このY男は、自分が汗だくになってティンパニーを叩いているのに、シンセサイザーのごときボタン一つで音作りができたと喜んでいる友達が許せない、と、本気で教師にくっついてかかってきた。Y男が本気で音作りに取り組んでいる証拠だと嬉しく思った。

また、本題材は音楽だけの創作活動ではなく、国語との組合せで計画した。学担の音楽の一つのありかたを試みたのだが、子供たちが予想以上に積極的に取り組んでくれた。音楽だけが一人歩きすることもない。もっといろいろな取組みを考えていきたい。

(2) 今後の課題

本題材を終えるのに、11時限を要した。週2時限の音楽科の授業としてはやはり多すぎる。先にも述べたが、4年生の音楽では積極的にたくさん楽器に触れ、その基本的な奏法を知ることが大切である。そのためにも、他の教科との関連をはかっていくとか2学期のもっと落ち着いた時期に取り組むとかといった工夫が望まれる。筆者自身はもっと言葉と音楽とのつながりを重視して行きたいと考えている。

ともあれ、このような「創作的活動」は子供たちにとっても教師にとっても大変有意義で得るところの大きな実践であった。

いつでも目の前の子供の何を伸ばしていきたいと教師は考えているのかをしっかりとつかんでいなくてはならないと思った。

図形楽譜も初めての試みだったが、先にも述べたように、今必要とされるのではなくしかも、他の人に必要なのではなく、しばらく経った時に、自分に必要なのだということにしか子供たちに気づかせることができなかった。イメージという面からの迫り方は弱かったように思う。

子供たちにとってそして誰よりも教師自身にとって「創作的音楽活動」がより身近で楽しくてたまらないものとなるように今後も努力を続けていきたい。

参考資料

新しい国語4上（東京書籍）

古いしらかばの木

立原 えりか

林の、ずっとおくの方に、しらかばの木が二本ありました。一本は年取った古いしらかばで、もう一本はわかいじょうぶなしらかばでした。

はやしのずっとおくの方でしたから、ごくたまにしか人はやってきませんでしたがときどき、犬を連れてかりゆうどがやってくると、いつも二本のしらかばを目印にするのでした。しらかばの近くに小屋があって、かりをする間、かりゆうどはそこに住んだからです。山登りをする人も、しらかばを目印にしました。しらかばをめあてに下りてくれば、ふもとへ下る道へ出ることができたからです。

しらかばはいつも、青い空の方へ、まっすぐに白い幹をのびしていました。ほかのどんな木よりもまっすぐで、せが高かったのです。けれども、真っ暗な夜になれば、しらかばの白い幹も、ほかの木と見分けることができません。夜になっても、山の頂上から、ふもととの村へ下りてくる人は、あったのです。だから、しらかばの木は、一ばんじゅう、歌を歌い続けたのでした。

「サヤサヤサヤ サヤサヤサヤ

左の道は迷い道

右の道をお行きなさい。

そうすれば村へ 出られます。」

どんな遠くからでも、しらかばの歌っているのが聞こえましたから、暗くても、迷わずにふもととの村へ下ることができました。その山でそうなんする人がいなかったのも、しらかばのおかげだったのです。

ですが、一ばんじゅう歌っているのは、年取った、古いしらかばでした。わかいしらかばも歌うことはできたのですが、まだ、古いしらかばほど、美しい、大きな声を出すことはできませんでした。

何年も、何年もの間、古いしらかばは、わかいしらかばに、歌を教えました。わかいしらかばは、だんだんとしらかばの歌を覚ええました。サヤサヤという節は、それほどむずかしかったのです。

ある、秋のことです。年取ったしらかばは、わかいしらかばに言いました。「おまえは、急いで歌を覚えなさいといけません。もうすぐあらしが来て、わたしはたおれてしまうから。」

わかいしらかばは、びっくりして言いました。

「たおれるですって？それではわたしは一人で、歌わなければならないのですか。そんなさびしいことはいやです。」

「けれども、しらかばが歌わなくなったら、人はきつと道をまちがえるにちがいない。わたしのたおれたあとへ、また新しいしらかばが生えるから、おまえはそのしらかばに、歌を教えてやるんだ。ずっと昔から、そうだったのだから。」

古いしらかばは、そう言うと、これまでよりずっといっしょうけんめい、わかいしらかばにうたを教えました。ところが、何べん歌っても、最後のところが歌えません。つかえて、歌がとぎれてしまうのです。

「もう少しだ。もうほんの少しで、おまえはわたしとすっかり同じに歌えるようになる。」

古いしらかばも、わかいしらかばも、サヤサヤ、サヤサヤ、歌い続けました。そして、とうとうひどいあらしがやってきたのです。風が、ビュービューと音をたててふき、雨がたきのようにふりました。空は真っ暗になり、かみなりも鳴りました。おそろしい夜でした。

けれども、そのあらしの中で、古いしらかばは歌い続けました。もう、自分が、あといく時間も生きられないと分かったからです。

「おまえの節は、たった一か所だけちがっている。そこは、こういうふう……。」

古いしらかばが、そういったとたん、風が、しらかばを根こそぎたおしてしまいました。

「どういうふうにな？」

と、わかいしらかばはたずねましたが、もう、古いしらかばは、二度と歌えなくなっていたのです。

よく朝は青い空が、ゆうべのあらしなどそのように、まぶしく光っていました。もう独りぼっちになってしまったわかいしらかばは、歌っていましたが、どうしても最後まで歌うことができません。

「こういうふう……。」

とえ教えかけて、古いしらかばがたおれてしまったからです。

そこへ、近くの小屋にいたかりゅうどがやってきて、たおれているしらかばの枝を折っていきました。

「新しいしらかばのまきだ。これを燃やすと、すてきなにおいがするんだぞ。」
かりゅうどはそういって、古いしらかばの枝を、火の中へ投げ入れました。
枝はパチパチと燃え上がりました。赤いほのおになる前の、そのパチパチという音が、しらかばの歌の節だったのです。

「そこは、こうなんだ。ほら ほら 聞こえるかい？」

古いしらかばは、ほんとうに最後の歌を、大声で歌いました。

「ああ あの節だったんだ 古いしらかばが、燃えていきながら歌っている」
わかいしらかばは、体じゅうに、温かいものが、いっぱいになってくるように思いながら、じつと古いしらかばの歌を聞きました。そして、今度こそ、わかいしらかばは、古いしらかばが歌ったとおりの節を、くり返すことができました。

「サヤサヤサヤ サヤサヤサヤ

左の道は 迷い道

右の道をお行きなさい。

そうすれば村へ出られます。」

わかいしらかばの、やさしい声を聞いた古いしらかばの枝は、うれしそうに、パチリとはせて、真っ白い、においのよいはいになってしまいました。